



『シートンの動物記』

よこはま動物園ズーラシア園長 ^{ます い みつ こ} 増井 光子

子どものころから動物が大好きで、時間があれば山野を駆けめぐり、野生動物の観察や採集に明け暮れていましたが、その一方で読書欲も旺盛でした。ともかく活字に飢えていたような状態でもありましたから、さまざまな分野の本にも目を通しましたが、やはり最も興味をもって読んだのは動物に関する本です。動物を観察し、本を読めば読むほど、もっと動物のことが知りたくなりました。

そのようなとき、中学校の担任の先生が一冊の本を貸してくださいました。それが『シートンの動物記』（評論社）だったのです。一読してたちまちそのおもしろさに引き込まれてしまいました。野生動物画家であり、ナチュラリストであり、文筆家でもあったシートンの動物記には、オオカミやクマ、オオツノヒツジなどたくさん野生動物のほかに、身近なイヌやウマ、ネコなどの家庭動物も登場します。動物物語という愛情物語を想起しがちですが、シートンの作品には悲劇的な結末を迎える話も少なくありません。シートンが活躍した時代はまだ猛々しい自然が身近に存在し、野生動物も人も力一杯生きるためにしのぎを削っていたのです。人の生活が最優先された開拓時代にあっても、シートンはいつも野に生きる動物たちの立場に立って物事を見ていました。シートンは画家でもありましたが、作品のなかには多くのスケッチも挿入されており、それがまたとてもいい雰囲気をもたらし出しているのです。中学一年のときに巡り会って以来、私の動物を見る目も大きく影響を受け、今に至っています。